寄 稿 文

元校長・元教頭・元教官

第 11 第校長　長田　冨夫　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
元教頭　小池　満男　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
元教官（元甲府地区消防本部）太田　政文　・・・・・・・・・・ 42
元教官（富士五湖消防本部）渡邉　準人　・・・・・・・・・・・ 43

卒業生（初任教育）

昭和 41 年度第 2 期（元大月市消防本部）古見　金弥
・・・・・・・・・・ 44
昭和 51 年度第 19 期（甲府地区消防本部）今井　　洋
・・・・・・・・・・ 45
平成 14 年度第 45 期（甲府地区消防本部）小沢　夕紀
・・・・・・・・・・ 46
平成 26 年度第 57 期（富士五湖消防本部）伊藤　卓弥
・・・・・・・・・・ 47
平成 27 年度初任総合教育第 1 期（都留市消防本部）清水　理香
・・・・・・・・・・ 48

ある出来事

山梨県消防学校　第１１代校長

長田　冨夫

昭和５０年代は、全国的に林野火災が多発し、昔ながらの人海戦術では近代消防の沽券に係わるので、この風評を打破すべく、自治省消防庁と防衛庁とがタイアップしてヘリコプターによる空中消火の導入を決め、陸上自衛隊保有の新鋭ＨＵ・１Ｂ型の中型ヘリと大型ヘリ・バートルの２機種を試験的に使い、北富士演習場において数次に亘る消火実験を繰り返したのだった。

丁度その頃、私は山梨県消防学校の「火災防ぎょ活動」担当だったためか、「ヘリコプターによる空中消火準備操法マニュアル」の起草を命ぜられ、参考文献の少ない中、試行錯誤の末、漸く脱稿し、何回か自衛隊ヘリを使い実地訓練を繰り返していた。操法のあらましは、地元消防団員が小型ポンプを使用し、消火剤を混入した水を大型水嚢に迅速に詰め込み、ヘリコプターの下部のフックに吊り下げるといった一連の作業の組み立てである。ヘリが実践で水嚢を開き、「空中消火」できるか否かが私の最も不安の種だった。

ある晴れた日、都留市に“林野火災”発生。瞬間閃いたのは、恐怖と不安以外何物もなかった。遂に訪れたか「運命の日」。自衛隊大型トラックと共に消防学校を出発し、都留市の火災現場直近の仮設ヘリポートに到着したのは、１４時頃だった。予て訓練した十数名の消防団員が待ち受ける中、機材の再点検と水利の確認。直ちに実践行動に移った。ヘリもローターを回転したまま待機していた。予てマニュアル通りの一連の作業は速やかに進行した。満タンの水嚢がヘリの下部に掛けられると一気にヘリは離陸し、急峻な火災現場に姿を消した。私は願った、祈った、叫びたくなった。ヘリよ頼む。「カラ水嚢」を吊るして帰ってきてくれよと・・・。

数分が過ぎると、軽快な爆音と共にカラ水嚢を振りながらヘリの機影が目に入ったのである。成功、空中消火の成功である。嬉し涙が頬を伝うのを払い、こすりながら、第２回、第３回と空中消火・地上給水作戦は続いた。作戦５回目頃、ヘリのパイロットから搭乗を要請され、空中消火の体験が急降下爆撃ならぬ危険極まる恐怖の急降下作戦だったのも今は懐かしい思い出である。

消防学校時代を振り返ると、あっという間の１８年間だった。県庁奉職３８年のうち、約半分は消防畑で碌を食んだわけであるが、張りつめた緊張とは裏腹に、時には明るい雰囲気の中で消防職団員への文武両道会得のための訓練礼式、予防・警防・救急・救助訓練の数々、兵たちの人生劇場、愛すべき消防の館は私の生涯の誇りであり、何物でもない。

５０周年によせて

元教頭

小池　満男

山梨県消防学校が節目である５０周年を迎えることに、心よりお祝い申し上げます。

私は、昭和４９年度から平成１３年度までの２８年間消防学校に勤務しました。

当時の社会情勢は、昭和３９年に開催されたスポーツの祭典「東京オリンピック」に向けて、高速道路や東海道新幹線などの交通網が整備されるとともに、社会経済の著しい発展に伴い消防需要が増大したことにより、「広域消防本部」の設置と消防職員及び消防団員の教育機関として「消防学校」の設置が都道府県に義務付けられました。

山梨県消防学校は、甲府市住吉にあった県職員研修所の敷地内に寮室を建て、事務室と教場は研修所の２階を使いました。訓練は、校庭が狭いため、時には道路も使うことがありました。

昭和４０年代の消防学校は、初任教育の期間が２箇月から３箇月と短く、年に数回教育訓練を行ったこともありました。特に、昭和４６年から昭和４９年までは、広域消防の職員採用が最盛期であり、入校できない職員を消防本部が独自に教育したことや、近隣の県で教育を受けた時期もありました。

在職した２８年間で印象深いことは、昭和５０年８月の旧消防学校の竣工式、昭和５７年及び昭和５８年と２年連続の台風被害により、グラウンドが被災者を救援するヘリコプターで埋め尽くされたこと。また、教育訓練において、初任教育の期間を国の基準に準拠した６箇月に改めたことや、救急Ⅱ課程をはじめ救急教育を充実させたことは今も懐かしい思い出です。

近年は、大規模地震や台風、集中豪雨などの自然災害が猛威をふるい、各地に甚大な被害が発生しています。また、今後は、首都直下型地震や南海トラフ巨大地震の発生が危惧されており、消防機関に対する県民の期待はますます大きくなっております。

消防学校は、県民の安全・安心を守る消防職員及び消防団員の教育を担う大きな使命があることに誇りを持ち、更に教育訓練に精励されますことを期待するとともに、山梨消防の発展を心より御記念申し上げます。

入校式を進行する筆者

初任学生に辞令を交付する筆者

５０周年に寄せて

元教官
元甲府地区消防本部
太田　政文

私は、昭和６２年４月から平成元年３月までの２年間、派遣教官として勤めさせていただきました。

当時、消防学校は、学校長・教頭・教官６名と庶務２名の計１０名のスタッフで学校運営に携わっていました。

今ここで、２９年前の当時を振り返りますと、色々なことが思い出されますが、まず着任当初は、現場一筋だった私に消防学校という専門的な基礎教育機関において、自分の職責を全うできるか不安の毎日を送っていました。そんな中、自分らしい授業とは、災害現場で培った経験を基に決して背伸びせず、学生と同じ目線に立ち、時には厳しく、時には優しく、同じ目的意識を持つことで、学校教育に対し平常心で物事に当ることができると思いました。

教育課程が始まる前に、各教官に担当科目の割り振りがあり、初任科においては消防実務・安全管理・火災防ぎょ・救助関係、消防団教育では火災防ぎょ・小型ポンプ操法などが担当になりました。

１年目は、大変でした。学校という慣れない環境で、初めて触るワープロを相手に、必死に担当科目の準備に追われ、夜遅くまで勉強し、頭痛に襲われたことも度々ありました。

ここで、特に思い出深い初任科は、毎日実技訓練の最後は体力錬成、いつもグラウンド２０周の駆け足をしました。体力のある者、ない者、全身汗だらけになり、助け合い、励ましながら全員が１つになり、最後まで走り抜いたことを思い出します。

今思えば、消防学校の数々の経験が、その後の消防人生に役立ったと思います。

結びに、今後ますます消防学校の発展を祈念いたします。

昭和６２年度初任教育学生の入校式にて
筆者は前列左から３人目

「宝」

元教官
富士五湖消防本部
渡邉　準人

この度、山梨県消防学校開校５０周年を迎えられましたことに心からお慶び申し上げます。

私は平成２４年４月から３年間、富士五湖消防本部派遣教官として勤めさせていただきました。２４年ぶりに市町村消防から派遣制度が採り入れられた年でもありました。私自身、この派遣教官を志願した理由は、若手の新人職員を自らの手で立派な消防士に育てたいと思ったからです。

いよいよ４月１日から初任教育第５５期がはじまり、私の役割は副担当でした。そして、５６人の初任学生を前に自己紹介です。さすがに頭が真っ白になり、しどろもどろになったことを今でも覚えています。

１コマ５０分の授業は短いようで長い５０分でした。威圧的そして、封建的な教育も１つの方法かもしれない。仲良しグループの教育では、消防の使命はもとより自らの命、仲間の命をも脅しかねない。命を懸けた職務であることを伝えるため、両者のバランスをうまく取り入れ、緊張感のある授業、楽しい授業を目指しました。

しかし、専科教育では、入校される方が私よりも上の階級ばかりで、とてもものが言えない状況であり、講義の内容はともかく、私は胸についている教官のバッジを頼りに入校者の前で授業をしていたような気がします。

最後の３年目は、初任教育担当として３年間培ってきたものを全力で伝えられたような気がします。新学校建設では、教務スタッフで授業終了から夜遅くまで意見をぶつけ合い、先進的な学校作りを目指していた頃が懐かしく思えます。

私にとって新学校完成とともに派遣任期が終了したことは大変残念でしたが、３年間の派遣中に多くの人たちに出会え、教官を経験できたことは私の消防人生の宝です。

どうか、これから入校されます消防職員・消防団員の皆様には、新消防学校の近代化された施設、装備の中で消防知識、技術、さらには消防精神の鍛錬に励まれ、地域住民の安全・安心のためにご活躍されますことを切に希望するところであります。

結びに、山梨県消防学校の益々の発展を祈念して寄稿とさせていただきます。

初任教育卒業生に卒業証書をわたす筆者

富士登山で初任学生を引率指導する筆者（左）

５０周年に寄せて

昭和４１年度初任教育（第２期）卒　業
元大月市消防本部　消防長
古見　金弥

山梨県消防学校開校５０年の歴史を刻まれ、誠におめでとうございます。

開校以来、あらゆる災害から県民の生命、財産を守るという崇高な精神のもとに活動する多くの消防職員、消防団員を輩出し、山梨消防の発展に大きく貢献して参りました。

開校当時を振り返えると、甲府・富士吉田・都留・大月の４市に消防本部が設置されていて、職員数も少なく、昭和４５年に峡北消防本部が発足し、以来、各地に消防本部が設置され、県下全域に常備消防体制が確立され仲間も増え、消防装備も年々充実されました。

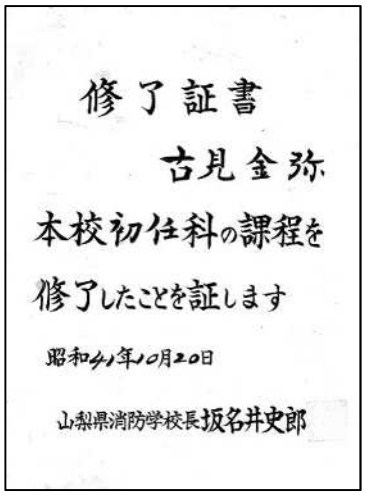
私の同期生は、甲府地区消防本部から３名と大月市から入校した私の４名でした。

当時の消防学校は、住吉の山梨県職員研修所を間借りし、宿泊施設もなく少ない教材で、授業日数は１５日でした。自宅から約２時間を費やし通学、坂名井史郎校長、山本直幸教官、七沢保教官、尾沢二郎教官をはじめ、部外講師に大変お世話になりました。訓練生は４名ですので、各個訓練はできましたが、部隊訓練、通常点検、ポンプ車操法などは部分的に、そして机上で実施しました。

開校５０年の歴史を刻み、教育訓練施設の環境整備は充実し、私の初任科時代には考えもつかない進歩、発展です。

全国各地に常備消防が発足し、消防費の増加により、消防署不要論が出た時期もありましたが、消防業務の需要が増大し、多くの消防関係者の努力により、消防業務の責務・認識を深め、消防体制の充実強化は目覚ましいものがあります。

今後も更に、消防学校はじめ、県下消防機関の進歩・発展、充実強化を心からお祈りいたします。


修了証書

古見金弥

本校初任科の課程を

修了したことを証します

昭和41年10月20日

山梨県消防学校長坂名井史郎

筆者の初任教育修了証

５０周年によせて

昭和５１年度初任教育（第１９期）卒業
甲府地区消防本部　次長
今井　　洋

山梨県消防学校が創立５０周年を迎えられましたことに、心からお慶びを申し上げます。

また、県内の消防職員並びに消防団員の教育訓練機関として創立された消防学校が半世紀を迎える節目に、このような寄稿する機会を得ましたことに、感謝申し上げます。

消防学校が、昭和４０年４月に甲府市住吉二丁目に開校し、その後、昭和５０年８月に現在の中央市今福へ新築移転され、私は翌年度、その第１期生として入校いたしました。初任科入校生は、６本部、合計４６名で、入校期間は、４月から７月までの４箇月間でありました。

当時は、１部屋８人の班編成であり、２段ベッドが４台ぎっしりと寮室を占領していました。各教官も厳しく、何事も連帯責任とする状況でありましたので、その班でひとりでも布団をたたみ忘れたり、たたみ方が悪かったりすると、８人全員が自分の布団を担ぎながら、真夏にグラウンドを１０周走らされたことは、今でも忘れることはできません。古き良き時代の思い出でありますが、今思えば、自分のことだけでなく、周りの状況を観察する力を持たせ、消防一家という絆と消防人としてのチーム連携を養うためのものであったと感じております。各教官の皆様には、ほんとうにお世話になりました。

消防学校は、地域住民の生命と財産を守るという崇高な使命を遂行する消防の教育訓練の場として、常に新しい知識や技術の提供が必要であります。さらに、消防人としての豊かな人間性を育成することが最大の使命であると考えます。

今後も、山梨県消防学校の良き伝統が受け継がれ、高い技術とともに地域の人達から信頼される優秀な消防職員並びに消防団員を育てていただくことをお願いし、更なる発展をお祈り申し上げます。

５０周年に寄せて

平成１４年度初任教育（第４５期）卒業
甲府地区消防本部
小沢　夕紀

山梨県消防学校創立５０周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

平成１４年４月、私は山梨県初の女性消防吏員として消防学校に入校しました。

ここが寮室だと案内されたのは、まだほんの少しペンキのにおいが残る真新しい一室で、入寮にあたり会議室であった場所を女性専用の寮室に改装していただいたと聞き、飛び上がるほど嬉しかったことを今でも鮮明に覚えています。

ただ１つ、窓のすぐ外は慰霊碑であったこと、国旗掲揚台のロープが田富に吹く夜風を受けてカランカランと大きな音を立てたことなど、私を恐怖の世界に誘うには充分な場所であったことも今となっては良い思い出です。

私にとって、もう１つの恐怖の世界は何といっても実技訓練です。運動神経も体力も十人並み、性格は至ってマイペースで負けず嫌いとは決して言えない、何をやっても２９人中２９番の私に、同じ組の４人は、梯子リレーなどの競争で負けるたびに嫌な顔一つせず、連帯責任の腕立て伏せや訓練中には「頑張れ！頑張れ！」と何度も何度も励ましの声をかけてくれたりしました。消防学校での半年間を無事卒業し、今私が消防吏員として歩むことができるのは、教官の皆様と２８人の同期のおかげであると感謝いたしております。

時代の変化に伴い、消防を取り巻く環境もめまぐるしく変化を遂げて行くことと思います。

母校の大学校歌にある「集まり散じて人は変われど　仰ぐは同じき理想の光」の一節と同じく、私たち消防吏員の使命や目的は、時を経てもなお変わることはありません。

最後に、山梨県消防学校での教育を基にこれからもよりよい山梨県の消防を築いていくことをここにお誓いいたしますとともに、山梨県消防学校が今後さらに充実し、ますます発展されますことを心よりお祈りいたします。

歴史の１ページ

平成２６年度初任教育（第５７期）総代
富士五湖消防本部
伊藤　卓弥

山梨県消防学校が開校５０周年を迎えられましたことに心からお慶び申し上げます。

平成２６年４月に私たちは、この歴史ある山梨県消防学校の門をくぐり、年齢・出身地も違う人たちが山梨県内から集まり、期待と不安、様々な思いを胸に消防士としての人生が始まりました。下は高校卒業、上は社会人経験者と年齢層が幅広く、打ち解けるには少し時間が掛かりましたが、日々の訓練や寝食を共にするうちに、知らぬ間にお互いが助け合い、仲間意識が高まりかけがえのない絆が生まれていきました。

私は、前職が消防という事で総代という重役に就くこととなり、訓練生として「教わる」事は勿論、自分が前職で培った技術や知識を「教える」よう心掛けて消防学校生活を過ごしていました。

消防学校の６箇月間で、数えきれないほどの問題が発生しました。しかし、その問題を解決していく事で、５７期全員が歩幅は狭かったかもしれませんが、一歩一歩成長していけました。それも、適切なアドバイスを下さった心温かい教官方のおかげであると今でも感謝の気持ちで一杯です。また、私にとっては、人をまとめるという事の難しさ、引っ張っていく難しさを思い知らされた６箇月間であるとともに、消防学校での経験は消防職員として、人として成長出来たかけがえのない一生の宝物です。

現在は、新校舎となり、私たちが学んだ校舎は無くなってしまいました。しかし、私を初め５７期全員、消防学校の６箇月間で経験した事は、各消防本部に配属され１年以上が経過した今でも忘れることなく、これからも一生大きな糧となり続けて行くと思います。また、旧消防学校の校舎で学んだ最後の訓練生として、山梨県消防学校の歴史の節目の１ページに載れたことを嬉しく思います。

最後に、山梨県消防学校がこれから先も飛躍し発展していくことを心からお祈り申し上げます。

強歩訓練で指揮をとる筆者

卒業式で最優秀賞を受賞する筆者

繋　が　り

平成２７年度初任総合教育（第１期）副総代
都留市消防本部
清水　理香

山梨県消防学校は、平成２７年度から新校舎となり、初任教育課程と救急科課程が合わさった８箇月間の初任総合教育課程となりました。私はその第１期生として、期待と不安を胸に抱きながら５２名の仲間と共に消防人生の第１歩をあゆみ始めました。

入校当初、まだ消防職員として右も左もわからない私たちに対して、担当教官を初め消防学校職員の方々は、熱心に指導してくれました。座学では消防の基礎的知識を学び、訓練ではロープ結索、ポンプ車操法、三連梯子など消防職員としての基礎的技術を習得するため日々訓練を積み重ねていました。訓練を積み重ねる中で、この期には「チームとしての連結力」という部分が欠けていました。初めのうちは、集合１つとっても授業開始時間を過ぎてしまったり、同じ注意を何度も教官に指摘されたりするなど、チームとして連結が取れていませんでした。しかし、訓練や寮生活を共にし、問題があった時は話し合いの場を持つことによって、一人ひとりが自分の事だけではなく、周りの人のことを考えながら行動出来るようになっていきました。消防というのは、常に隊で活動する仕事なので、コミュニケーションを通して意思疎通をはかり、チームとして同じ意識・方向性のもと連結しながら活動することの重要性を学びました。また、私は消防学校の中で副総代という役職に就かせてもらいました。総代をサポートしながら、副総代として「この期をまとめていこう」という思いは強くありました。実際にやってみると、集団をまとめる難しさをとても強く実感しました。特に、相手へ何かを伝えるとき自分の思いだけをぶつけても上手くいかず、視野を広く持って接し、行動に移すことで少しでも変化することを学びました。ここでの経験は、私にとってとても成長できた期間となりました。

消防学校での経験や仲間と共に切磋琢磨し合いながら過ごした８箇月間は、とても貴重な時間であり、日々感謝しながら繋がりを大切にしていきたいと思います。

副総代としてあいさつする筆者

救急訓練で応急処置を実施する筆者（右）